

文学の研究を

志して



龍谷大学文学部
日本語日本文学専攻 特任講師
笹尾 佳代
平成14年3月 教育学部卒業
平成16年3月 大学院修了

長い学生生活を終えて：

私は今、龍谷大学で文学部日本文学日本文学専攻の講師をしています。奈良教育大学で大学院修士課程まで学んだ後、同志社大学大学院で博士課程を修了して現在の職に就きました。担当しているのは、日本近代文学に関する授業です。樋口一葉をはじめとした女性作家の作品や、文学作品に描かれた女性像などについての研究をしています。

よく学び、よく遊ぶ

奈良教育大学での日常を振り返ると、この言葉が浮かんできます。所属していた国語科の授業や、近代文学のゼミで専門的なことを学ぶうちに、「何を知らないのかを知る」ことができました。知識不足はもちろんですが、「考えてこなかったこと」や「触れてこなかったこと」の存在に気づき、焦りのような気持ちを覚

えました。ともかく実際に感じてみたという思いから、美術館や映画館に出かけたり、いろいろな土地を旅したりしました。導いてくださった先生方や、とても良い友人たちとの出会いは、何よりの幸運だったと思います。この頃の体験は今の私の基礎となっています。

広がりの中で

大学の教壇に立つようになって、プレッシャーを感じることもありますが大勢の学生と共に文学について考えることに喜びを覚えます。昨夏には、大学のイベントで、小説家にインタビューをするという機会にも恵まれました。これまでとは違う角度から文学を捉えることを、興味深く感じています。これからも、精一杯の努力を続けていきたいと思っています。



大学イベントで小説家にインタビュー

ひと・あれ・これ

やってみたいと

わからない



奈良県立奈良西養護学校 教諭
寺田 みずき
平成19年3月 教育学部卒業

仕事が好きなこと

奈良県の教員として採用され、もうすぐ2年が経とうとしています。私は特別支援学校で、知的障害を持つ子どもたちと楽しい毎日を送っています。夏休みや冬休みになると、子どもに会えないことがつまらなく思ってしまうほど、私は子どもと過ごしている時間が大好きです。大学時代の友達には、教師をしている人も多くいますし、一般企業で働いている人もいます。彼らとお互いの仕事の話をしていくと、私自身が「好きなことを仕事にできているのかも知れない」と思わされるのがよくあります。教師を目指して採用試験の勉強をしていた時は、「好きなことを仕事にしたい」という思いはほとんどなくて、それよりもただ「教師になりたい」という一心だけだったと思います。いざ採用されてからも、とにかく自分のできることを全力でしようとして、必死で目の前に立ち向かっているだけでした。

挑戦する4年間に

どんなことでも、自分に合っているかどうかはやってみないとわかりません。新入生の皆さんも、大学生として過ごす貴重な4年間を、いろいろなことに挑戦してみる時間にして欲しいと思います。どんな経験だって、無駄なことはありません。無駄かどうかは、未来の自分が決めることだと思います。楽しいことも辛いことも含めて、充実した4年間を過ごしてください。



授業風景「くまさんにりんごを食べさせてあげてね」

未知の国へ



教育学部 学校教育教員養成課程 身体・表現コース 4 回生
(大阪府立高槻北高校出身)

松村 智子

from Romania

「Iasta estel」にハマる

私は、2008年8月から2009年3月まで、本学の交換留学生として、ルーマニアという国へ行っていました。ルーマニアというのはヨーロッパの東側にある国ですが、ルーマニアがどこにあるのか、どんな国かがすぐにわかる日本人という人は少ないのではないのでしょうか。私も未知な部分が多いまま出発しました。



友人家族と

出発まで独学でルーマニア語を勉強しようとしていましたが、ルーマニアに到着した時は本当に挨拶程度しかできませんでした。もちろん空港に着いても、寮に着いても戸惑うことばかりで、何とか寮の自分の部屋に落ち着くことが

できた時は、心の底からほっとしました。ルーマニア人はラテン系の民族のためか明るく大らかで、反面とても適当でルーズ、という気質を持っているとよく言われます。そのため、日本では考えられないトラブルも日常茶飯事で、寮のお湯が一ヶ月も止まったり、いきなり部屋を出て行けと言われたり、いろいろなことが起こりました。物がスムーズに運ばないことが当たり前で、そんな時決まって言われるのが「Iasta estel」という言葉でした。これは、ルーマニア語で「そんなもんさ」というような意味で、何が起きてもみんな「Iasta estel」で片付けられてしまいます。「郷に入れば郷に従え」というのが、これほど難しいことだとは思っていませんでした。

足りないものを数えない

それでも、そんな生活にも少しずつ馴染むことができ、言葉も上達し始めました。現地では、ルーマニア語を学習するための授業を英語で受け、ルーマニア人と生活していたので、言葉を上達させるにはとても良い環境だったと思います。言葉を覚えると、ルーマニア人や周りの友達もとても喜んでくれて、どんどん話が弾むようになりました。たくさんさんの会話を通してルーマニアやルーマニア人のことを知り、自分も日本について話す。そんな経験を通して、ルーマニアのことはもちろん、日本のことも改めて考え知ることができたのではないかと思います。

最初に述べたように、日本とルーマニアではいろいろなことが違って、不便に感じることもたくさんあります。でもそればかり見て、不満を数え上げてはそこの本当の姿は見えないし、人と仲良くなることもできません。違いを受け入れ、上手にいかないことも楽しんでしまえるような余裕と強さを持つこと、それが留学を楽しくするコツだと思いました。

留学生レポート

日本とトルクメニスタン



日本語日本文化研修留学生
(アザディ・トルクメン国立世界言語大学)
アリシェール・エゲンベルディエフ

from Turkmenistan

日本に来て感じたこと

私が日本に来て感じたのは、日本の大学と比べると、トルクメニスタンの大学はとて

トルクメニスタンという国
今年の10月から、私は日本語・日本文化研修留学生として、奈良教育大学で勉強しています。

私の母国・トルクメニスタンは、日本ではあまり知られていません。国土は日本の約1.3倍、周囲をカスピ海とイラン、アフガニスタン、カザフスタン、ウズベキスタンに囲まれています。国土の約9割が砂漠で、人口約600万人のうち85%近くがトルクメン人で、平和的なスンニ派のイスラム教徒です。公用語はトルクメン語で、ロシア語も広く話されています。少数ですが、私のように日本へも留学生が来ています。

ニスタンの全ての大学には、次のようなルールがあります。まず大学の制服を着なければなりません。そして、民族の帽子をかぶらないといけないし、大学生時代は車を運転できず、タバコも吸えません。また寮について言えば、国内の全ての大学寮では夜9時が門限です。9時にチェックがあつて、その後は外出できません。しかし、私はそれを悪いと思いません。なぜなら、それは私たちの民族の伝統的な習慣で安全のためでもあるからです。でも、日本に来たらこういうルールが全くないので、最初は戸惑いました。例えば初めは朝帽子をかぶって行くことだったり、どんな服を着れば良いのか、選ぶのに時間がかかったりしました。でも今は慣れてきて、ファッションにも少しだけ興味が出てきました。



外国人留学生実地見学旅行にて